

1. 活動報告（事務局 記）

—10月27日（火）稲こぎ（脱穀）が終わりました。原田宗一会員の機械で今井会長、原田、田村両副会長、藤村、渡辺正会員、事務局8名にて行いました。水分が19%で（基準15%以下）本日乾燥機に入れ、乾燥度をみて臼挽き（粳すり）に入ります。粳すりは原田武元会員の粳すり機にて行います。今年は会員に優先販売していましたが収穫が少ないため販売することは出来そうにありませんので、あしからず。

・稲こぎ[脱穀] ・粳すり[臼挽き] ・精米[米を搗（つ）く]等々の言葉の意味がお分かりになったでしょうか？

—10月28日（水）夕方、もち米粳の乾燥が水分が15%以下になり臼挽き[粳すり]を行いました。吉富匡会員、事務局、原田武元会員提供粳摺機にて行い182kg（約3俵）のもち米玄米が収穫量でした。

—11月1日（日）9名の参加でした。

① 協議事項

イ) 借地問題の協議を行いました。

ロ) 協議会からのその後の結果報告はまだありません。

ハ) 昨日行われた山大工学部(関根教授教室) 水質検査結果報告あり

② 活動作業

イ) エコアップ (ため池の青みどろ除去、スイレンの間引き等)

ロ) 田んぼの水張り開始(稗等雑草防止と水鳥の飛来用)

—11月2日（月）一つの案として、うべ環境コミュニティ(浮田会長)などの傘下に入れば、県、市のNPO法人化推奨の活動団体となるので土地の取得にも希望的可能となるであろうとの思いで、今井会長、関根会員、西原会員、原田事務局長の4人で、うべ環境コミュニティと協議しました。先方の考えは、私たちの会がやはりNPO法人化することがベストだということでした。私たちの会の活動費（主に維持の材料費など）が多いことも、私たちが手を引いた場合の後始末に問題が残るようです。

(この団体はつくる会と同じ環境パートナーシップ会議協働団体でもある)

—11月21日（土）本日の参加者は 16名でした。

① 協議会とのことについての話し合い

里山ビオトープ今後の活動の問題点について、関根会員より提案があり、

・会員にアンケートを記入いただく。12月初めまでに

(ビオトープで活動したいことや、やりたくないこと等) 送付

② 活動作業

イ) 湿地帯のスゲの間引き、ため池ゾーンのみズキンバイ保護、イグサの間引き

ロ) 湿地帯散策橋の一部補修工事

ハ) はぜ懸け用 冠竹の整理保管

その他 休日にタテバチドメグサの間引を前田歳朗エコアップリーダーが活動されています。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎ 見学者

予定はありません

◎ 行事

- 12月4日（金）餅つき準備
- 12月5日（土）餅つき
- 12月19日（土）維持活動

3. 来訪者の声（東屋のノートより一部抜粋）

—10月31日— 晴れ 秋日和 70歳の男性

市内から小学校3年と幼稚園生女の子の孫を連れて遊びに来ました。

メダカを捕ったり、タニシ拾いをして里山の楽しさを味わいまして、ありがとうございました。

4. 会員の声（100号特別寄稿）

「会報100号記念投稿記事」

（内藤 武顕 記）

来年3月でビオトープは生誕10年・・・・・・・・

1歳の赤ちゃんが10歳、10歳の小学生が20歳、20歳の成人は30歳。そして、60歳の熟年は70歳の後期高齢者。時の流れをしみじみと感じます。

会報11月号は記念すべき100号となりました。私は出遅れなので、第83号が初刊となります。100号は苦労と笑いの満載でしょう。楽しみです。

さて、私なりに浅い経験の中の想いを俳句に綴ってみました。お陰さまでビオトープの四季を数句詠むことができました。僭越ですが、五句紹介させていただきます。

“ゆっくりと 春風受けて 水車”

会報第83号に掲載させていただきました。新会員の心境を水車の音に託しました。

“合鴨の 今が出番と 青田入る”

合鴨のひなどの初対面句です。子供たちの手から放されたひな鳥が一直線に青田入りしたかわいいい姿は今も鮮明です。

“7人の 侍散って 蝗取り”

会報第98号に掲載、来年の大量発生を今から楽しみにしています。原田事務局長の目を吊り上げた顔が目につかびました。

“夏山の 風がはこぶや 沢の音”

清瀬峡の傾斜面はいつもきれいに手入れされています。沢の音をはこぶ夏山からの風は疲れを癒してくれます。（林弘会員に感謝）

“合鴨の 消えて久しや 秋の池”

小学生の願いに応じて合鴨の2羽がビオトープの池に戻ってきた。すすき揺れる夕暮れの浮島に2羽の合鴨がいつも仲良く寄り添っていました。或る日突然に、跡形もなく姿を消しまった。行方を知っているのは静かなこの秋の池だけ。

番外編 “肥料まく 嫁姑や 刈田後”

原田事務局長よりTEL、「嫁が姑と一緒に田んぼで仕事をしている。嫁はうなずきながら肥料をまいちよった。近年めったに見れん風景」と感心しきり、そこで厚東川べりの刈田後を眺めながら句をつくりました。

会報の100号が200号へと連なっていくことを心より祈念します。

「川 ガ キ」

(金子 道昭 記)

何のことかお分かりになりますか？

この言葉、自分が創作したものではなく、いわゆるアウトドア作家と呼ばれている人たちの文章に散見され、すべてを漢字にすれば川餓鬼、「川を遊び場に行っている子供たち」とでも解釈されるでしょうか、同じガキのつくガキ大将以上に現在ではまさに絶滅危惧種そのものです。

ビオトープ活動の一環である里山自然観察隊の川の探検の行事に参加して子供たちを見ているうちに、ふと自分の子供のころピッタリのこの言葉が浮かびました。

その当時の「川ガキ」の一端を紹介しますと……

時は昭和30年代初めで、厚東川ではダムが完成して10年程度経っていましたが、川の両岸は鬱蒼とした竹や柳で覆われ、淵や瀬が点在して水も澄み、アユ、ウナギ、オイカワ、フナ、ナマズなど、魚の種類も量も豊富でした。

いろいろな方法での魚釣りに始まり、ウナギかご、ハエとりびん、特に夏休み中は毎日のように大急ぎで昼食をかきこみ自作の水中鉄砲を下げて川に直行、泳ぐのはもちろんのこと、飛び込み、石を抱いての淵の底のかけっこ、潜っての魚つきなどで時も忘れ、これだけは今も変わっていない4時半のサイレンが鳴るまで水に浸かりつきりでした。

水から上がる頃には、わずか4時間程度の不完全な無重力だったただけなのに体が重く足がふらついていました。

余談ですが、この体験もあって宇宙飛行士の若田さんが地球帰還後に自力で歩いて記者会見に臨まれた姿に、宇宙でのたゆまぬトレーニングの成果とはいえ本当に驚きました。

この夏の川の探検で、生憎の降雨後のにごり水にもかかわらず子供たちが嬉々として水に戯れる様子を見るにつけ、当時も今も本質は変わりの無いことを再確認しました。

もちろん当時と今日ではあらゆる自然環境や社会情勢が大きく変わっていますが、楽しかった川ガキのころを思い出すにつけ、少しでも自然と触れ合う場（フィールド）をビオトープ活動を通じて提供することができたらと、これから活動ができるだけ長く続くことを願っています。

「会報100号記念投稿」

(関根 雅彦 記)

長いようで短い10年でした。人間が力を合わせるとこれだけ大きなことができるんだということが最初の驚き。そして、だんだん生き物が増えてくる喜び、一方では、放っておくと手がつけられなくなる自然の力や、全体の生き物が増えていく陰で消えていった種も多かったこと。なぜいなくなったのか明確な理由もわからず、勉強不足を痛感しました。里山自然観察隊では子供をダシにして自分が楽しみ、また勉強させてもらった。アイガモ農法や冬期湛水などのチャレンジも興味深かったし、浄化実験や水質調査など、仕事でもお世話になりました。

これから先、いつまで続けることができるかわかりませんが、これまでやってきたことは、大いに誇れることだと思っています。

「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」の活動を振り返って (中本 亜矢子 記)

休耕田を利用して、ボランティアによる市民の手でつくられた「里山ビオトープ二俣瀬」は、誰もが自由に里山の自然に触れ合える場所です。ビオトープとは、ドイツ語の造語で、「昔からそこにいた生き物たちが自分の力で生きていけるところ」という意味で、ここ、里山ビオトープでは、本来のビオトープの意味に加えて、自然と人の共生する場所「里山」の再生に重点を置いています。早いもので、来年3月には、会の活動が10年を迎えます。この会にボランティアの一人として参加してきた自分の所感を述べたいと思います。

《活動に参加するきっかけ・その当時の自分の思い》

私がこの活動に参加するきっかけとなったのは、平成12年の夏、宇部市の広報で、ビオトープの市民ボランティア募集の記事を見つけたからです。たしか「二俣瀬の休耕田を利用して、市民の手で環境に優しいビオトープを創りませんか？」みたいな呼びかけだったと思います。当時、わが子は小学生でした。この活動に参加したら、子どもたちに自然に触れる機会をつくってあげられるのではないかと思います、勇気を出して応募しました。

初めてビオトープの予定地である休耕田を訪れたときのことを、今でも覚えています。市民センターから細い道を歩いて、休耕田に向かいました。道沿いに続く民家の庭先には、野菜や色とりどりの花が咲いていました。左にお墓を見ながら、ゆるい上り坂のカーブを曲がると、上りきったところで急に視界が開け、青空に向かってすっと伸びている大きな2本の木がありました。そしてその向こうに、山と山のあいだに抱かれるようにして広がる休耕田が見渡せました。休耕田の向こうには青々とした棚田が広がっており、その風景に、昔どこかで出会っているような懐かしさを感じました。

どこにでもあるようなありふれた風景。だからこそ、誰もがどこかで出会っているような気持ちにさせられる風景。里山の風景というのは「日本人の心のふるさと」なのだと思います。

その風景を目の当たりにして、子どものころ里山で過ごした体験を思い出しました。毎年夏になると、私は、盆のあたりの1週間ほど母の郷里で過ごしていました。そこは、小高い山のおもとに田畑が広がるのどかな里山でした。祖父について田んぼや畑に行ったりは、きゅうりやトマトをもらったり、産みだての鶏の卵を近所の農家にもらいに行ったり、蚕小屋を見せてもらったりしたものでした。小川でタニシや小魚を捕まえたり、山歩きをしてきれいな花を見つけたり、蝉やカブトムシを捕まえたり。体験するすべてのことが新鮮で、毎日が発見の連続でした。遊び疲れたら、ひんやりした井戸水で冷やされた西瓜を食べ、眠たくなったら畳の上で昼寝をして。時間に追われることなく自然のなかでのんびりと過ごした時間が、今となっては本当に贅沢な時間だったように思います。扇風機もなかったし、お店屋さんもなかったし、ゲームも漫画本もなかった。今の子どもたちには想像できないくらいなあんなにもなかったんですけどね。

子どもたちにこんな「里山体験」をさせてあげたいなあ、私の夢は膨らみました。

《活動に参加して》

さて、何もないところから休耕田にビオトープをつくる。それは思った以上に大変なことでした。何をどうしていくのか、集まった人それぞれにビオトープに期待するものも違い、なかなか意見がまとまりません。何度も白熱した議論を重ねた末、私たちの目指すビオトープのコンセプトは、「二俣瀬という里山にあるビオトープ」、「人と自然との関わり方」も学べるビオトープにしようということになりました。参加者の思いがようやく纏まって、会の名称を「えんぼとたんぼの始発駅 里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」と決定したときには、とてもうれしく思いました。ちなみに「えんぼとたんぼ」とは、遠方（えんぼ）のビオトープが近くの池（たんぼ）にやって来たという言葉の語呂合わせです。また、「始発駅」という言葉には、私たちの活動がここを出発点に全国に広がっていけばよいという願いが込められています。

それからは、毎週土曜日に集まっては、みんなで作った設計図をもとに、ビオトープづくりに精を出しました。杭を打ち、石を並べ、池を作り、橋を作り、水車を作り、東屋を作り、看板を作り、ただの休耕田だった場所が、みんなの手でわくわくするような場所「里山ビオトープ二俣瀬」に変身していきました。泥ハネで顔も衣服も泥んこ、全身が汗ビッシヨリになりながら、それでもみんなの顔はすごく輝いていました。好奇心と冒険心に満ちた子どもの心が蘇ったかのような笑顔に、心から楽しみながら作業をしているのだと思いました。そして平成14年3月に、みんなの思いが込められたビオトープが完工したのです。

《里山自然観察隊》

会では、毎年「里山自然観察隊」を募集し、ビオトープとその周辺の自然観察の場を、子どもたちに提供してきました。わが子も「里山自然観察隊」の隊員になり、念願の「自然観察」や「里山体験」に参加しました。蝶や蜻蛉を追いかけたり、鮎のすばしこさに目を丸くしたり、蓮の葉に溜まった、まあるくて大きな露をあつめて遊んだり、音の出ない竹笛をつくったり…。竹やぶのなかに入って、筍堀りをしたこともありました。そのほかにも、田植えや、稲刈り、蕎麦づくり、餅づくりなど、ここには書ききれないほどいろんな体験をさせていただきました。

「里山自然観察隊」には、毎年たくさん子どもたちが参加しています。中にはリピーターで、何年にも亘って参加している子どももいるのですが、人と人とのあたたかいふれあいのなかで「自然観察」や「里山体験」ができるこの会は、居心地が良いのではないのでしょうか。会では、子どもたちに少しでも有意義な体験をしてもらおうと、さまざまな工夫を凝らしてきました。プリントな

どを配布し、よく似た植物や蜻蛉の見分け方などを丁寧に解説したり、観察に必要な道具を揃えて誰でも自由に使えるようにしたり、子どもたちが楽しく参加できるよう「二俣瀬券」（地域通貨券）を発行したりしました。安全にも細心の配慮をしていて、毎回、危険箇所の周知・徹底を行い、川のぼりをするときなどは、当日の早朝に会員がコースの安全確認をしています。多くの子どもたちがこの体験を通じて、里山の良さを実感し、里山を守っていくことの大切さを理解してくれればいいなあ。そんな思いで、微力ながら私も会のメンバーとして活動に参加させていただいてきました。

《里山ビオトープ二俣瀬をつくる会の今後》

会の運営には、立ち上げから現在に至るまで、厚東川水系・森・川・海水環境ネットワーク協議会（山口県の事業）のバックアップがありましたが、協議会の事業が2010年をめぐり、つくる会の法人化を待つ解散になると言われています。つくる会の法人化については、後々の活動で非常に困難な問題が起ると判断し、臨時総会で法人化はしないと結論付けました。したがって、私たちの創り上げてきた「ビオトープ」は、創設当初の契約どおり元の農地に復旧せざるをえないと聞いています。

創設当時は、会員である私たちも10年後の活動など想像することすら出来ませんでした。しかし、事務局の原田さんを始めとする会員の皆さんの尽力のおかげで、規則正しく月2回の作業日にビオトープの維持管理をし、「里山自然観察隊」を続けていくことができました。立派なホームページもあります。会の活動の様子を綴った会報も、規則正しく発行され続け、とうとうこの秋には100号が発行されます。会報には10年間の活動の記録がきちんと残されており、本当に素晴らしいことだと思います。この会がこうして活動できているのは、会を支えるために、会員の一人ひとりが自分たちにできることを、責任を持って果たしているからだと思っています。

「里山ビオトープ二俣瀬をつくる会」は、本当に素晴らしいボランティアグループだと思います。多くの市民・県民の皆さんにこの会の良さを知っていただき、里山に親しみ、あたたかい仲間に出会えるこの会に参加する人の輪が広がっていくことを願ってやみません。今後も今までどおりの活動を続けられる方法がないか、会員一同模索しているところです。

「川合玉堂の名画「彩雨」とビオトープ」

（田村 勝芳 記）

8月のNHKテレビ番組で川合玉堂の日本の風景画を作ると題した作品が放映された。この作品の彩雨の画を見た時ビオトープの水車風景と良く似ていたので興味を持ち調べて見た。玉堂の作品は1940年に美術展覧会の出品作で東京奥多摩の多摩川上流で画かれたもので自然の中のスケッチを画く玉堂の評価を受けた作品とされており日本の風景を追い求めた玉堂の理想郷である。玉堂は岐阜長良川で生まれ1957年に83歳で亡くなるまで素朴な情緒と人間生活を楽しみに描いている。二俣瀬ビオトープも10年前に発足時5メートルの大型水車を設置し箕で引いた水で水車を回す方式をとり会員でつくりあげた思い出がある。会員で手作りして完成姿が玉堂の画と似ているのも何かの縁かも知れない。

ビオトープの箕は水漏れと老朽化で2年前に山口きらめき財団の助成金でサイホン式の給水方式に改造したのでこの箕は撤去されたがサイホンは二俣瀬の史跡駒の頭をモデルにしておりビオトープの中で水車とともにいつまでも残して行きたいものである。（参考までにビオトープの箕の写真を添付します。東京国立近代美術館蔵の「彩雨」（1940年作、絹本彩色）については、インターネットなどで検索して下さい。）



5. ビオトープ関連（ビオトープのトンボたち）（管 哲郎 記）

（18）ヨツボシトンボ（トンボ科・ヨツボシトンボ属）

Libellula quadrimaculata asahinai

ベッコウトンボと同属ですが山口県内では植生豊かなため池に多く見られます。北海道や東北地方では多く、西南日本では産地が限られるようで寒い地方に多いようです。日本特産亜種で4月より羽化が始まり5月の連休頃より成虫が多くみられます。

ガッチリした体は毛深く翅の結節部に黒褐色斑があり、前翅に2つ、後翅に2つ合わせて4つの黒褐色斑が名前の由来のようです。春先から梅雨までに多く見られますが8月から9月頃まで場所により見ることもあります。

環境省より採集・捕獲禁止されているベッコウトンボ（下図-1参照）のいる池に棲んでいますので採集するときにはよく注意して捕獲しましょう。

*プロのハンターの捕獲や標本作成のために捕獲し見つければ100万円の罰金刑が科せられますが、一般の家族による昆虫採集であやまって採った場合には問題ありません。



ヨツボシトンボの♂



ヨツボシトンボ♀の羽化



ヨツボシトンボの♂成虫



(図-1) ベッコウトンボの♂成虫

6. 会よりの連絡事項 (事務局より)

臨時総会で決議された件について、ただいま宇部市に対して交渉中です。県側も市側も両行政方針はNPO等の法人化が一番の解決策とのことで、つくる会の臨時総会決議とは現在物別れ中です。今、市の環境共生課の笹尾課長(会員)にて他の方案で「厚東川水系・・・協議会」と協議されています。いずれにせよ今年度内に再参集を呼び掛けることとなります。

7. 編集後記

2001年(平成13年)5月に会報1号が発行されたが、途中休んだ月もあったが、どうにか継続されて、今回で100号となった。会員への情報伝達的手段として取り上げたものなので、カラー写真も少なく、ウイットに富んだ文章でもなく、あまり面白みのない薄っぺらな会報であったが、ただ続けていくことだけに努めた。一步一步の緩い歩みであっても、継続はやはり力強いもので、原田事務局長は記念に1号から100号までを一つにまとめて製本したいと言っておられる。それはまた会にとっても貴重な財産となるであろう。多くの方から原稿を頂き、編集委員にも助けられてやってきたからこそ、この結果が残せたと思います。皆様、本当にありがとうございました。

(西原 一誠 記)